

十和田神社

北東北有数の知名度を誇る十和田神社ですが、その歴史的な起源には 2 つの説があります。

1 つ目の説によると、伝説上の人物である第 12 代景行天皇（71 年～130 年）の皇子・ヤマトタケルノミコトを祀るため、807 年に武官の坂上田村麻呂が神社を建立しました。

2 つ目の説によると、熊野三山の僧侶、南祖坊がわらじと錫杖（しゃくじょう）を神から授かり、「わらじが破れた所に住むべし」というお告げを受け、そのわらじが尽きた場所が十和田湖のほとりだったという話です。南祖坊はそこで生活の準備を始めたのですが、十和田湖を守る龍女を脅かしていた巨大な八頭の大蛇に遭遇します。奇跡が起き、九頭の龍と化した南祖坊は、七日七夜におよぶ戦いの末、ついに龍を退治します。その後南祖坊は湖の守り神に加わり、今日に至るまで、神聖なパワースポットを拝みに来る数々の参拝者を見守ってきました。

神仏習合による融合が図られていた神道と仏教ですが、明治時代（1868 年～1912 年）に入ると新政府が寺と神社の分離を命じます。これを受けて、南祖坊のご神体は十和田神社の境内にある小さな社殿に移されました。